

データサイエンス教育の語られ方 (第1回情報学シンポジウム)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東北学院大学学術振興会 公開日: 2024-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 努 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000268

データサイエンス教育の語られ方

鈴木 努

近年複数の大学で新設が続いているデータサイエンス系の学部において、約半数の私立大学では入試科目に数学が必須でないというウェブ上の記事（産経新聞 2024 年 1 月 9 日配信）をめぐって SNS 上で話題となった。

では、より専門的な文脈で学術的文章において「データサイエンス教育」がどのように語られてきたのかを概観するために、国立情報学研究所の運営する学術情報データベース CiNii で「データサイエンス教育」をタイトルに含む学術記事を検索したところ、2023 年までに 288 件の記事がヒットした。それらを発行年ごとに集計して推移を示したのが図 1 である。滋賀大学が国内で初めてデータサイエンスを冠する学部を設置した 2017 年以降に記事数が増えており、データサイエンス教育に対する関心が高まったといえる。

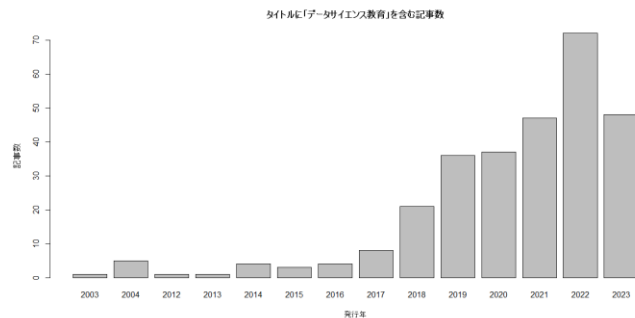


図 1 「データサイエンス教育」に関する記事数の推移

また、それらの記事タイトルに含まれる語彙を調べると、近年では「大学」に加えて「高校」や「文系」の使用が増え、「研究」「開発」に替わって「実践」が増加していた。早くから用いられた「統計」に加え、「数学」も増えており、特に最近では「AI」が増加していた（図 2）。これらのことから、データサイエンス教育の対象となる年齢層や学部の拡大と教育実践が進み、それにともない統計教育や数学教育への関心も高まっていることが考えられた。

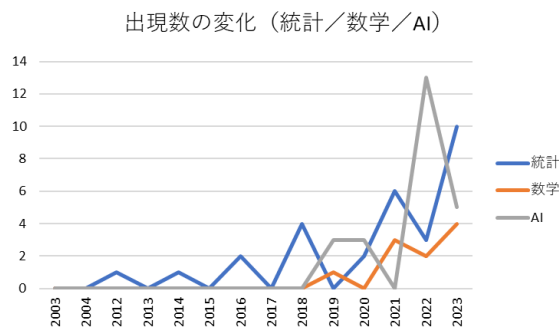


図 2 記事タイトルに含まれる語彙の変化